

「ノンフィクション」は社会科学の方法たりえるか

——「ニュージャーナリズム」期前後の 沢木耕太郎の作品分析を通じて

武 田 徹

本論では一般に「ノンフィクション」と呼ばれている報道＝文芸ジャンルについて、つまり主に取材・調査によって事実により近づき、一つの物語世界を構成する表現方法について、それが社会科学の一方法として認められるかどうかを議論する。

結論を先取りして述べれば、筆者はノンフィクションの社会科学性について否定的であり、日本の多くの作品は、後世の歴史学者が参照可能な資料になりえないだろうと考えている。そして、そうした「質」をノンフィクションが担ったのは、「ニュージャーナリズム」の受容前後の時期ではないかというのが筆者の仮説だ。以下にその仮説を検証してゆきたい⁽¹⁾。

I

ノンフィクションの方法的特性について分析的に考察した例は極めて少ない。それは「ノンフィクション」の対立項としての「フィクション」、つまり小説に対する文芸批評の隆盛と比べるとあまりに非対称的である⁽²⁾。その中で貴重な例外のひとつである篠田一士『ノンフィクションの言語』の論点を紹介することから論を起こしたい。

篠田の議論はまずフィクションとノンフィクションを巡る状況認識から説き起こされる。「現下の小説、もちろん、日本の現代小説ということだが、かならずしも、それだけではない。むしろ、ほくの知るかぎりの海外の小説をも含めて、いまや、小説世界におけるフィクションの構築はノンフィク

ションの大きい脅威にさらされている」(篠田1985: 9)。それは、強いて言えば軒を貸していたら母屋まで盗られたようなものか。近代小説はその勃興期に「情報提供の機能」を担って登場していた。それは「読者が経験はおろか、容易には見聞できないような、くさぐさの事象を報道する機能というか、任務をもっていた」(*ibid.*: 12)。そうした機能から小説が隔たるのは、小説の芸術化が進んでのことだったと篠田は書く。こうした小説の芸術化によって空き地となった情報提供機能を担う別のジャンルが求められ、発達したのがノンフィクションだった。

そして、そんな「ノンフィクション」を構成する言語の一次的な機能を、篠田は「あくまで、事実を、読者に、できるだけ正確にとらえさせ」(*ibid.*: 41) ることとしている。この基本を押さえたうえで篠田はノンフィクション言語の第二の機能として「自由な視界のなかで、大小さまざまな断片の事実を、読者の恣意によって、いささかも変形させることなく、しかも、それらの断片を自在に組み合わせることを許すこと」(*ibid.*) と書く。事実の断片を自在に組み合わせるとは、星々の間に線を引いて星座を見取るように、事実の間に様々な因果性や相関性を認める仮説を立て、幾つかの補助線を引きつつ出来事全体を解釈することと言い換えられよう。

こうした言語機能を担うノンフィクションが、フィクションの脅威となっているのはなぜか。そこで篠田がひとつの検討対象としたのがニュージャーナリズムと呼ばれるノンフィクションの登場だった。ニュージャーナリズムとは何か。公式な場に登場するときは常に純白のスーツを装い、外見からして既存の(オールド)ジャーナリストとは異なると意図的に示したトム・ウルフが、自分自身のものをも含めて何人かのニュージャーナリストたちの作品を集めて編んだアンソロジー用書き下ろした『ニュージャーナリズム論』の説明を引いておこう。

ウルフはニュージャーナリズムをアメリカの1960年代が生んだと考える。「一九六〇年代は風俗とモラルという点から見れば、アメリカ史上最も異常な十年だったのだ。いまから百年後に、歴史家がアメリカの一九六〇年代について書くとき、ベトナム戦争や月着陸や政治的暗殺の十年だったとは書か

ないだろう。……風俗とモラル，生活様式，社会への対応のしかたが政治的
事件より決定的にアメリカを変えてしまった十年と書くはずだ」（ウルフ
1974：276）

そうした激動の社会状況を前に，しかし，小説家たちはあっさり背を向
け，それを書くことを諦めてしまった。そして生まれたアメリカ文学の巨大
な空白を埋めたのがニュージャーナリズムだったとウルフは書く。こうした
状況認識は篠田が小説の芸術化によって生じた空白をノンフィクションが埋
めたと指摘したのと相通じている⁽³⁾。

こうしたニュージャーナリズムについて，ウルフは表現技法的に4つの特
徴を数え上げる（*ibid.*：cf. 277）。

- 1：場面から場面へ移動しながら描写を積みかさねてゆくこと。
- 2：会話をそのまま記録すること。
- 3：三人称の視点。ジャーナリストは自伝の作家や小説家と同じく，第
一人称の視点——「わたしはそこにいた」をしばしばとってきた。
しかしこれはジャーナリストにとって窮屈なことである。ジャーナ
リストはただ一人の登場人物の内部にしか読者を案内できないから
だ。そこで人物の考えや気持ちを探り出し，三人称で書いた。
- 4：日常の習慣，家具の特徴，衣類などに対する態度，表情，眼つき，
ポーズなど，場面にはいつてくる象徴的な事実を記録すること。

確かにこれらの特徴はニュージャーナリズムと呼ばれる作品におおむね共
有されている。細かなディテイルまで描き込み，あたかもテレビカメラで現
場を同時進行的に記録してゆくかのように，シーンからシーンへ，場面から
場面へと移動してゆく。こうした表現手法はバルザックなどの近代小説に
倣っている。

II

しかし，こうして，近代小説の文体を手に入れたニュージャーナリズム

が、その代わりに失ったものもあったのではないか。本論ではそれを日本語で書かれたニュージャーナリズムの傑作としての誉れ高い『テロルの決算』の作者である沢木耕太郎を例にすることで議論をしてみたい。

「僕の内部に1960年という年に一種のトライアングルを形成する事件が3つあったというイメージがあったんです」。沢木は自作解説文に書く。「ひとつが所得倍増論。ひとつがこの作品のテーマの山口二矢の浅沼さん刺殺事件。もうひとつが安保改定時の全学連運動。その3つを長編で書くと1960年という1年がはっきり見えてくるし、しかもある時代の流れの変化が見えるだろうと考えたんです」（沢木1990：82）。

そしてトライアングルに該当する三作品が書かれ始めた。所得倍増論を相手取った作品が『危機の宰相』で、月刊誌『文藝春秋』1977年6月号に掲載された。後に全集に収められた際に著者自身が書き下ろした「『危機の宰相』についてのノート」の中でも、沢木は自分が歴史を描こうとしていたのだと繰り返す。「たぶん前年に一九三六年の「ナチス・オリンピック」を書いたことが大きかったのだろうと思う。さらに本格的に、ひとつの歴史的出来事の全体を描いてみたいという思いが強くなってきた。そのとき、私の中でしだいに大きくなってきたのが一九六〇年の「所得倍増」である」（沢木2004：10）

今、読み返すと『危機の宰相』は実にオーソドックな印象を与える。丁寧な資料調査を行い、論証を組み立ててゆくところは沢木の思惑通りに歴史書のように感じられるし、文体的にも奇をてらうところがない。たとえば「所得倍増」という言葉の生みの親と目されている中山伊知郎を訪ねる箇所はこう書かれている。

私は、それを確かめる第一歩として、一橋大学の元学長であり、中央労働委員会の会長を永く務めていた中山伊知郎に面会を求めた。

しかし、中央労働協会の一室で会った中山の話聞いていくに従って、事はそれほど単純ではないことが理解できた。

中山が「所得倍増」の端緒と目される発言をしたのは、伊東光晴のい

う「昭和三十五年正月のラジオ」でもなく、中村隆英が書いている「五九年秋」でもなかった。一九五九年（昭和三十四年）の一月である。一月三日付けの読売新聞に短いエッセイを書いているのだ。……

「しかしね」と中山は言った。「この文章が池田さんの『所得倍増』を生んだとは、どうしてもぼくには思えないんですよ……」（沢木2008a：42-45）

ここで「私」として登場するのは沢木自身だ。そして沢木の取材に対して中山が語りかけ、その言葉が「 」に収められて記録される。取材の経過を著者の一人称で書き留めてゆく『危機の宰相』は従来の（オールド）ジャーナリズムのスタイルだ。

ところがトライアングルの第二辺、つまり浅沼稻次郎社会党書記長の暗殺事件を描いた『テロルの決算』で文体が変化する。この作品について再び作者による自作解説から引く。

ちょうどこの頃に、ニュー・ジャーナリズムというアメリカで起きたひとつの流れが、日本にも断片的に伝わり始めました。これに関してはいろんな考え方があるんだけど、僕はニュー・ジャーナリズムを方法の問題に限定したのです。その中でも三人称で叙述してゆくスタイルのニュー・ジャーナリズムに対して深い関心を持ちました（沢木1990：82）。

こうして『テロルの決算』はまず『文藝春秋』1978年1月号～3月号に掲載された。この雑誌初出作品は分量が単行本の半分ほどで、構成も異なっている。まず刺殺事件を描き、浅沼の社会党葬のシーンがそれに続き、カレンダーを僅かに遡って暗殺翌日の社会党臨時大会の様子が描かれる。そして章が改められ、暗殺者・山口二矢が17歳とあまりにも若いので誰かに使喚されたとみなす説が紹介され、それを否定するもうひとつの説が紹介される。

二矢の死後、右翼の間にひとつの説が流布されるようになった。

それは二矢伝説とでもいうべきもので、もしそれが真実だとするならば、二矢という人間の個性と浅沼暗殺事件の全体を考える上に極めて重要な意味を持つことになる。

その伝説とは――

山口二矢は浅沼稻次郎を一度、二度と刺し、もう一付きしようと身構えた時、何人もの刑事や係員に飛びかかれ、後ろから羽交い絞めにされた。その瞬間、ひとりの刑事が二矢の構えた短刀を、刃の上から素手で把んだ。二矢は浅沼を刺した後、返す刀で自らを刺し、その場で自決する覚悟を持っていた。しかし、その刃を握られてしまった。自決するためには刃を抜き取らなければならない。思い切り引けばその手から抜けないことはない。しかし、そうすれば、その男の手はバラバラになってしまうだろう。二矢は、一瞬、正対した刑事の顔を見つめた。そして、ついに、自決することを断念し、刀の柄から手を離れた……（沢木 1978a：368）

この後、章が再び改まると文章のトーンが変わる。舞台も一転して1977年、つまり作品が執筆されていた時点での東京広尾の外科医院だ。そこに「ひとりの若い男」が訪ね、医師に取材を申し出る。掌に刀傷を負った刑事を診察し、治療した記憶がないか、と。医師は患者の個人情報を守る義務があり、遠回しにしか返答しなかったが、その刑事の傷は浅かったと告げる。それを先の「伝説」が確かめられた瞬間だとして沢木は描く。二矢はその職業を続けることを不可能にするかもしれない深手を刑事に負わせることをためらい、刀を引き抜くことを止めた。二矢はそこまで一瞬にして考慮できる成熟した人物であり、誰かに使喚された狂犬のような少年ではなかった、そう確認した上で雑誌連載時の『テロルの決算』は二矢が暗殺に至る過程を追ってゆく。

外科医院を訪ねたシーンに登場する「若い男」とは、言うまでもなく沢木自身だ。自分が取材に臨んでいるのに沢木は「私」という一人称を使わない。そこに『危機の宰相』との大きな違いがある。ニュージャーナリズムの

三人称の記述に自覚的になった象徴的な部分だと言える。

単行本化でもその文体は維持されるが、構成が大きく変わる。社会党葬の箇所は二分割し、前半は雑誌掲載時と同じ冒頭の位置に残されるが、草野心平の追悼詩を望月優子が朗読する感動的なシーンは作品の最後に近い第六章末に移された。そして丸の内署に勾留された二矢が取り調べを受ける様子、そして自決に至る様子を描く第七章「最後の晚餐」を挟んで最終章「伝説、再び」で作品は完結に至るが、雑誌では冒頭に登場した外科医院を訪ねるシーンがこの最終章に移動されている。こうした変化をどう理解すればよいのか。

III

篠田は前掲書で二つのノンフィクション言語の機能が『春秋左氏傳』の「經」と「傳」に対応していると考えていた。『左傳』は事実関係の叙述である「經」と解釈を含む「傳」とを併記する。たとえば桓公元年の稿はこう記される。

【經】 元年，春，王の正月，公位に即く。三月，公，鄭伯に垂に會す。鄭伯璧を以て許の田を假る。夏，四月丁未，公，鄭伯と越に盟ふ。秋，大水あり。冬，十月。

【傳】 元年春，公，位即き，好みを鄭に脩む。鄭人復た周公を祀り，卒に祔の田を易へんことを請ふ。公之を許す。三月，鄭伯璧を以て許の田を假るとは，周公と祔との爲の故なり。夏，四月丁未，公，鄭伯と越に盟ふは，祔の成るを結ぶなり。盟ひて曰く，盟ひを渝へば，國を享くること無からん，と。秋，大水あり。凡そ平原水を出だすを大水と爲す。

冬，鄭伯盟ひを拜す。宋の華父督，孔父の妻を路に見，目逆へて之を送る。曰く，美にして豔なり，と⁽⁴⁾。

こうした『左傳』の「經」の部分、つまり『春秋』の本文について王安石が「斷爛朝報」と呼び、砂をかむような無味乾燥ぶりを非難したことに篠田

は反発する。王によれば「経」は「朝報」、つまり官報の燃え残りに過ぎない。そこには「傳」、つまり物語がなく、事実の断片の集積にすぎないという。こうした見方に篠田は批判的だ。「ノンフィクション言語の建前に立てば、「経」の文章を「斷爛朝報」などとあざ笑うわけにはゆかないはずである。事実を言語で追いかけて、突きつめてゆく場合、その言語を最も厳密に用いようとするれば、結局のところ、この「経」の「斷爛朝報」の状態にいたる。つまり、ここにこそ、純粋ノンフィクション言語ともいうべきものの典型が読みとれるはずだ」(ibid. 317)

ここで篠田は「経」と「傳」をニュース／解説、ファクト／オピニオンという二分コードとして、「ニュースに特化した客観報道」、「オピニオンが混じれば主観報道」と対応させる常識的な報道観を踏襲している。ノンフィクション言語の第一機能と第二機能の使い分けもその轍を踏んでいたし、「「傳」から「経」に遡行するのが、ノンフィクション言語本来のありかた」とみなすのも、ノンフィクションも報道であるかぎり、事実報道の枠内に留まるべきだという考え方をうかがわせる。

それでも篠田は「傳」を否定しない。しかし順序を重視する。「今日、ノンフィクションといわれ、多くの読者をあつめているものは、かならずしもこうしたノンフィクション言語の正道に従っているとは思えない。「経」から「傳」へと下行するのが、あたかも常道であるかのごとく錯覚し、「傳」が語る事柄の、多様なにぎやかさで人目をひくというのが一般化しているようだが、それでも、「経」と「傳」との相関関係が保たれているならば、ノンフィクション言語は、それなりに作動し、機能を発揮しているといっている。困るのは、「経」の所在を忘れ、「傳」を語ることのみが、ノンフィクション言語の見せ場だと思ひこみ、それに熱中する作物がいかにも多いことか」(ibid. 317f)

こうした篠田の指摘と照らし合わせて『テロルの決算』はどう読まれるべきか——。沢木が雑誌初出時から更に推敲を重ね、構成を変えたことに触れた。それは読者をつかむノンフィクション言語の第二の機能をよりよく発揮させる工夫だと言えらる。最初に投げかけられた謎に答える事実は最後

まで語られないことで、事実を連ねて描き出されるノンフィクション作品という「星座」は大きく想像力の世界に広がる。

しかし、ニュージャーナリズムの採用はそれだけではない効果をもたらしている。『テロルの決算』には三人称で描かれる中に一人称で語る部分が含まれる。たとえばクライマックスの暗殺のシーンを例に引こう。

二矢は焦りを覚えながら舞台に駆け上がる地点を必死に探した。すると、彼のかみ込んである通路の突き当たりの舞台下に、ニュース映画社の機材を入れるための大きな黒い箱が置いてあるのが眼に入った。それは、二矢にとって、まさに常設の階段以上に安定した踏み台となった。

二矢は一気に駆け上がった。

《舞台に駆け上がる時、瞬間的に「やめようか」という考えが脳裏を走りましたが「やるんだ」とすぐに打ち消して走りました。

駆け上がったところは狭い舞台の袖で、そこに二台のテレビカメラがあったことは覚えておりますが、その右側か、左側か、中央を走り抜けたかは覚えておりません。

腹のバンドに差している日本刀を抜いたのはどの辺か記憶はありませんが、テレビカメラの所を1メートルぐらい走り抜けた時には刀を抜き、右手で柄を握り、左手の親指を下にして掌で柄の頭を押さえ、腹の前に刀を水平に構え、浅沼に向かって夢中になって突進しました。

浅沼の演説している所までは七メートルから十メートルはあったように思います。

「国賊！ 浅沼、天誅を下す」という信念で、浅沼にぶつかるようにし、身体全体に力を入れ、刀を水平にして浅沼の左脇腹辺を何も言わないで突き刺しました。

浅沼はぶつかるようにして刺す直前、私の方を一寸ふり向いたようでした》(沢木2008：273f)

《 》でくくられている部分は、「私」という一人称が登場しているだけでなく、表現のレベル全般においても文体的不統一が目立つ⁽⁵⁾。『危機の宰相』では《 》は出典を示し得る資料からの引用だったが、『テロルの決算』の《 》は出典が書かれていない。しかしその内容を読むと二矢自身が語っていることが推測できる。一人称の「私」は二矢自身なのだ。だが、二矢はこれほど詳細に事件を、いつ語ったのか。というのも二矢は事故直後に丸の内書に連行され、収監されており、拘留中に首を吊って死んでいる。外部者で接触したのは接見した弁護士だけだ。そしてその弁護士にも多く語る時間はなかった。そうした経緯からこの《 》部分は二矢の供述調書から引用したものではないかと推測されてきた⁽⁶⁾。

だが、そうであってもそれを沢木は認めることができない。もしも取材協力が司法関係者の中にいたのだとしても、それを書いてしまえば守秘義務規定違反で協力者を窮地に追い込む⁽⁷⁾。もっともこれについては別の可能性もある。「山口二矢供述調書」は実はその全文が生前の山口と交流のあった荒原朴水・編著書『大右翼史』に付録として掲載されていた。その『大右翼史』は66年に非売品として刊行され、73年には『増補大右翼史』として再版されてもいる。

ただし、そこに収録された調書と先に引いた《 》に該当する部分を照合させると相違点もある。

舞台上に駆け上（「が」がない）る時、瞬間的に「やめようか」と云う考えが脳裏を走りましたが「やるんだ」とすぐに打ち消して走りました。

駆け上がったところは狭い舞台のそばで（テンなし）そこに二台のテレビカメラがあったことは覚えて居りますが、その右側か、左側か（テンなし）中央を走り抜けたかは覚えて居りません。

腹のバンドに差している日本刀を抜いたのはどの辺か記憶はありませんが、テレビカメラの所を1米位走り抜けた時には刀を抜き、右手で柄を握り、左手の親指を下にして掌で柄の頭を押（「さ」なし）え（テン

なし)腹の前に刀を水平に構え、浅沼に向(「か」なし)って夢中になって突進しました。

浅沼の演説している所までは七米から十米はあったように思います。「国賊! 浅沼、天誅を下す」という信念で、浅沼にぶつかるようにし(テンなし)身体全体に力を入れ、刀を水平にして浅沼の左脇腹辺を何も言わないで突き刺しました。

浅沼はぶつかるようにして刺す直前、私の方を一寸ふり向いたようにした(「。」で終わらず「、刺したところ手ごたえがあり……」と文は続いている)(山口1960:1753)

*下線部分が沢木の単行本収録時の記述と異なる。場合によって()に入れて相違点を説明した。

この「供述調書」については、後に産経新聞も1999年8月25日朝刊にその内容を載せている。1面に「昭和三十五年十月十二日、東京日比谷公会堂で浅沼稲次郎・社会党委員長(当時)を刺殺した山口二矢(おとや)=逮捕後に自殺、当時(一七)=の供述調書の全文が、一四日までに初めて明らかになった」と報じ、24面に11月1日付調書の要旨と2日付調書の全文を掲載、25面に三池炭坑無期限ストや安保闘争に明け暮れた不穏な状況の中で起きたテロ事件だったとする解説記事を掲載し、識者コメントも集めている。

産経新聞社は自社発行の『正論』12月号に今度は1日付調書の全文、2日付要旨を再掲。その前書き部分で調書の出所として「ことし八月十五日『山口二矢烈士供述調書』(学純同総本部発行、非売品)が刊行された」と指摘しており、出典を明らかにすると共に前掲新聞紙面で「十四日までに明らかになった」と書いたのは刊行前にその内容を入手したことを意味していたと明かした。

もちろん『大右翼史』に既載であるので、産経新聞が「初めて明らかになった」と書いたのは事実と反する。産経新聞で取材を受けていた識者の誰もがその存在に言及していないことから『大右翼史』に供述調書が載っていた事実はあまり広く知られてはいなかったようだが、同書は初版、増補版とも公

共図書館に所蔵されて一般閲覧可能だったし、初版だけでなく増補版にしても沢木が『テロルの決算』を書く前の刊行で、沢木はこの書籍を通じて調査に接触し得た可能性がある⁽⁸⁾。

しかし、真実は分からない。網羅的にテキスト・クリティークを行えば資料の系統的な把握はある程度可能だろう（たとえば産経版と大右翼史版の相違は少なく、資料的に同系統であろうと推測できる）。だが沢木がその資料を用いたかどうかについては、そもそも沢木自身が参考文献通りに記載したという保証もない以上、検証作業は壁に当たらざるを得ない。

そして、この「壁」を強固に用意するものこそニュージャーナリズムのスタイルなのだ。ニュージャーナリズムは膨大な取材の賜物だ。書き手たちは獲得した情報を精査・総合して「その時に何がどのように起きていたか」を正確に描き出せるまでに持ってゆく。そうした作業が背景にあってこそ、小説のような三人称の物語として出来事を書ける。そして、こうして小説と見紛うスタイルを獲得したがゆえにニュージャーナリズムの作品が篠田の指摘するように小説の脅威となる。

ところが三人称の記述は、そのシーンを描くために取材がどのように行われたかを隠してしまう。ニュージャーナリズムの作品では、出来事が起きている時点でそこに関わっていなかった取材者は物語に登場しない（例外は取材者自身が出来事の当事者になる場合で、沢木が「若い男」として自分を登場させたのは、それが病院医師への事後取材を含めてひとつの物語の中に収める工夫だった）。

こうして取材の経緯が伏せられることは利用方法次第では大きな価値を発揮する。分析的なノンフィクション論として篠田前掲書と並んで貴重な例外である『言語としてのニュージャーナリズム』で、著者の玉木明はこれを「ニュージャーナリズムが武器として三人称を用いる」と表現している。例として挙げているのはボブ・ウッドワード、カール・バーンスタインの『最後の日々』だ。ウッドワードとバーンスタインはウォーターゲイト事件で辞任に追い詰められてゆくニクソン大統領の最後の100日間を描く上で、394人にインタビューをしたという。しかし、その取材は全て「背景説明」として

使われた。要するに被取材者の名前や身分は明かされない。そうした扱いを保証したのがニュージャーナリズムの文体だった。玉木はこう書いている。

「三人称」においては、その構文に含まれる内容が「語り手=私」を経由することなく、直接その構文の「主語=三人称」へと結合される。

「三人称」では、それを語った人、すなわち「情報提供者」の身分を伏せたまま、「キッシンジャーは……」と語ることができるのだ。……二人はこの「三人称」の性格に依拠しなければ、けっしてホワイトハウスの内部を描くことはできなかったのだ。その意味で、『最後の日々』はこの「三人称」を最大の武器にしているのだといっている（玉木1992：131f）

そして沢木もまたそんな三人称の特徴を利用している。供述調書がどのように入手されたか、それどころかそれが供述調書からの引用なのかすら明らかにせずに書ける。取材源秘匿の原則はそこで完璧に守られる。

V

しかし、この「武器としての三人称」は自らに刃を向けるものだ。

たとえばジャーナリズムが自然科学をモデルとして客観的実証性を主張していたのは19世紀末から20世紀初頭の時期に限られ⁹⁾、その後、そうしたジャーナリズム観は修正されたと言われる（大井1999：cf. 25）。だが自然科学への素朴なあこがれが消えても、指向は残る。現役のジャーナリストにして20世紀前半のジャーナリズムを代表する理論家でもあったウォルター・リップマンは、ジャーナリストがより多くの科学的精神を獲得することを望みつつ（コヴァッチ2002；cf. 90）、同時に「ニュースが数学的に説明できなくても問題ではないが、実際は、ニュースは複雑でつかみどころがないため、良い報道するには科学の長所を最大限行使すべきだ」（Lippmann 1995：74）と述べており、科学モデルを現実的に実践できるというよりも、それを理想として掲げていた。その考え方は原寿雄が「結局、自然科学的な

意味での客観報道は不可能であり、幻想にすぎないことになる。そこで報道に求められる客観性とは、あくまで努力目標であると考えたい。客観報道とは決して没主観を前提とするものではない。あるテーマを報道しようとする時、そのテーマの本質を最もよく表していると考えられる事実をできる限り豊富に取材し、できるかぎり客観的に、構成、表現する。客観的に表現するということは、自分の主観的立場をもできるだけクールに客観視するということだろう」(原1987:135)と、書いていることとも通じる。つまり素朴な客観主義的立場は取らないが、自然科学的な事実認定や明晰な論証はやはり依然としてジャーナリズムの理想たりえているのだ。

こうしたジャーナリズムの科学指向と響き合わせることができる科学観は、カール・ポパーのそれではないか(ポパー1971-2: cf. 311-348)。ポパーは反証可能性に開かれていることに注目した。科学者は仮説を立てる。その仮説を覆す反例がないか探し、みつければ反証がなされたことになる。反証され得るというのはポパーによれば科学的命題の条件であり、反証され、その結果を踏まえて仮説を修正してゆく事が科学の進歩に繋がる。

逆に反例がみつからないことを正しさの証明とする姿勢をポパーは批判した。それは内容が空虚であるが故に反証しようがない同語反復的な命題であるか、経験的世界から遠い形而上学的命題である可能性が高い。それらに対して反証可能性に大きく開かれた命題ほど、ポパーによれば多くの反証を経由してより高い科学性を持つのだとされる。

こうしたポパーの科学論はジャーナリズムのあり方を思うときにも適用可能だ。報道は速報性を要求されるので常に仮説として提示される。報道は可謬主義 fallibilism 的であるべきであり、そうである以上、反証に開かれているべきでもあろう。ところがニュージャーナリズムは取材源秘匿を徹底させるので反証のために手がかりが残さない。もちろんニュージャーナリズム以前のジャーナリズムでも取材源秘匿はひとつのモラルだったが、その一方で出典明記の原則をもジャーナリズムは自らに課す、一種の矛盾した構図があった。秘匿せずには被害が発生する取材源以外は明示というケース・バイ・ケースの使い分けで、ダブルスタンダードを回避して来たのがジャーナ

リズムの現状だろう。そして秘匿しなければならない場合も、記事の信頼性を失わないために可能な限り情報の出自を示す。「政府高官筋によれば」等々の常套句は、そうした事情の中で採用されている。それは事後的な反証に向けて道を開く努力だとも考えられ、そうしてジャーナリズムは（社会）科学的であろうとしているのだ。

しかし、ニュージャーナリズムの仮説は反証可能性に開かれていない。出典情報は場合によって確信犯的に消され、何もかもが行間の闇の中に消えてしまう。『テロルの決算』で大宅賞を受賞した時期のインタビューで沢木はこう答えている。「ぼくは果たしてジャーナリストかと考えると、確かにノンフィクション・ライターではあるけれど、いわゆるジャーナリストではないような気がするんですね。それはなぜかという、現実に対して、それほど深く責任をもっていないし、正義感も義務感も持っていないからです」（沢木1979：83）。

沢木は現実を科学的正確さで記録し、後世に残そう意図としてるジャーナリズムとは違う方向に進もうとしている。それはニュージャーナリズムの後に沢木が採用したスタイルに象徴されている。当初想定されていた60年代三部作の3冊目はずいぶん書かれず、沢木は『一瞬の夏』を上梓する。引退していたボクサー・カシアス内藤の復帰戦を描いたその作品では、ニュージャーナリズムの三人称とは打って変わって、徹底した一人称の記述が採用される。この変わり身について沢木はこう説明している。

アメリカからもたらされたニュージャーナリズムに接し、方法上の思考が変化しました。その変化の方向は、一言でいってしまえば、どうやって「シーン」を書いていかに尽きます。そこでの問題は「シーン」をどう獲得していくかだった。「シーン」を手に入れるには二つの方法があるんです。つまり、ひとつは自分が見たものなら「シーン」を書けるということ、もうひとつはひとから聞いて「シーン」を構成するということです（沢木1981：97f）。

この二つの方法のうちニュージャーナリズムは「ひとから聞いて」シーン

を構成した。そのために膨大な取材を必要とした。沢木もそれを実践した。しかしこの方法には問題がある。「三人称の叙述、それも神の視点から書く手法を用いると、取材源が叙述の中で全部塗りつぶされてしまい、取材された結果だけが羅列されていく」。供述調書をそれと示さずに用いることを沢木が確信的に行っていたことを窺わせる表現をしたあとに言葉はこう続けられる。「そこでは書く本人にすごく厳しい倫理観がないと、歯止めのない泥沼のような偽造、変造の文章ができてしまう」(cf. *ibid.* 98)。

こうした危険そのものを避けることができないか。それを考えていて「もう一回パッと一人称に戻ってみたいと強烈に思った」と沢木は書く。そして「自分(私)が見聞きしたシーン」しか書かないという方法を徹底することで、ニュージャーナリズムに固有の問題を乗り越えてゆけないかと企てる。その成果としての結実が『一瞬の夏』だった。

とはいえ、後に「私ノンフィクション」と自称することになるこの徹底した一人称の記述法で、沢木は「見てきたような嘘を書く」ニュージャーナリズムの危うさを越えられたのだろうか。実は沢木自身の評価はどこか口幅ったい。「こうして(私ノンフィクションで：引用者註)で上がったノンフィクションは、小説とどう違うのかと聞かれると、ちょっと返す言葉がなくなるんだけど、ひとつあるとすればやはり何に殉じるのかの違いになると思う。とりあえずいま、ここで私がノンフィクションを書いてきたといえるのは、その物語の展開にとって、ある箇所はこう書き換えた方がいいと分かっている、事実は曲げられない、その事実には殉じようという意識だけは持ちつづけてきたからです」(*ibid.* : 100)

自分が見たこと、聞いたことしか書かない私ノンフィクションで、それが事実であることを保証できるのは「見た＝聞いた」著者本人だけに限られる。だからこそ事実殉じる本人のこだわりが問われる。ニュージャーナリズムから離れてみたが、やはり事実殉じる倫理なしには「私ノンフィクション」も作者が想像力で自在に世界を書き出せる小説と一線を画し得ない。

もっともこうした経過を辿ったのは、ニュージャーナリズムや私ノンフィ

クションといった区別を越えて、ノンフィクションという表現ジャンルそのものに対する沢木自身の考え方の限界だったのかもしれない。たとえば「仮説」について沢木が述べた文章は象徴的だ。

私がノンフィクションの読み手に望むことがあるとすれば、ノンフィクションは決して事実そのものではないということを知ってほしいということだ。あらゆる記事、あらゆる報告、あらゆる作品は仮説である。それらの仮説は、さらなる仮説によって補正されるべきなのである。できることなら、読み手はそのようにして提出されるさまざまな仮説を通して、自分自身の仮説を組立てて欲しいと思う。そして、その時、最も大切なことは、それすらもやはりひとつの仮説にすぎないことを自覚していることだと思うのだ（沢木1982：126）

ここで「ノンフィクション言語の第二の機能」について思い出すべきだろう。篠田はそれを「大小さまざまな断片の事実を、読者の恣意によって、いささかも変形させることなく、しかも、それらの断片を自在に組み合わせることを許すこと」だとしていた。事実の断片を組み合わせる自由は作者にもあり、それは事実を積み重ねてひとつの物語世界を構成するということだ。『春秋左氏傳』に倣えば「經」に対して「傳」を用意するということである。しかしそれは作者の仮説にすぎない。そんな作者の仮説を前に読者もまた自分で事実を恣意的に組み合わせて仮説を立てる権利を持ち、作者の仮説は読者の仮説によって検証される。それがノンフィクションの読まれ方の宿命だろう。そのプロセスが事実の適切な検証を踏まえて進められれば、ノンフィクションもポパーの言う反証可能性に開かれたものになる。しかしニュージャーナリズムは事実の出典を隠蔽するために、また私ノンフィクションは全ての「確かさ presence」を作者の内面に帰属させ、外部から介入の余地をなくしてしまうために、反証可能性に向けて開かれない。反証できないので読者の仮説もまた仮説に留まり続ける。反証できないという意味で沢木のノンフィクションは一貫して科学的命題にはなりえない。

以上の検証を経て、沢木のノンフィクションはニュージャーナリズム期から科学的なジャーナリズムとの乖離を示し始め、作品化、文学化をより重視する道を歩んだと結論づけたい。そしてそんな軌跡を辿った沢木を一貫して代表的なノンフィクション作家とみなしつづけたことは、日本のノンフィクションが社会科学の指向に乏しいことのひとつの象徴であると考えてられよう。社会構築主義的な表現を用いるなら、日本でノンフィクションは「社会科学」であるよりも「文学」として「構築 construct」されたのだ。

その点、沢木がニュージャーナリズムから転進したのとちょうど同じ頃に、アメリカでも進んでいたもう一つの転進の試みとの対照は無駄ではないはずだ。アメリカではポスト・ニュージャーナリズムの潮流としてリテラリージャーナリズムと呼ばれる作品群が80年代に多く書かれた。リテラリージャーナリズムの研究者であるノーマン・シムズはその特徴を5つ数える。即ち主題への没頭 *Immersion*、記述の構造への配慮 *Structure*、記述の正確さ *Accuracy*、語り口 *Voice*、語り手の責任 *Responsibility* だという（奥出1988：cf. 185）。特に注目すべきは最後の「責任」の概念だろう。それは沢木が自分は「ノンフィクションライターではあるけれど、いわゆるジャーナリストではない」と規定し、「現実に対して、それほど深く責任をもっていないし、正義感も義務感ももっていないから」と応えていたことと鮮やかな対照をなす。

たとえばリテラリージャーナリズムの代表的作品とされるトレイシー・キダー『超マシン誕生』はスーパーコンピュータの開発過程を参与観察と取材によって描き出したものだ。文体的にはニュージャーナリズムの三人称が多いが、著者キダーが「私」を主語に取材相手と会話を交わす記述も混じる。「日常の習慣、家具の特徴、衣類などに対する態度、表情、眼つき、ポーズなど」よりも作品の主題に関わる事実関係を丁寧に書き留めることに作者の重心が移されている。結果として小説と見紛うまでに作品世界の完成度を高めたニュージャーナリズムの華やかさには欠けるが、技術史のおおざっぱな記述では抜け落ちてしまう、技術開発を支えた人間たちの生身の格闘の記録を正確に残す作品たりえている。それが篠田の言う「「傳」から「經」に遡

行する」「ノンフィクション言語本来のありかた」となっていることは興味深い。

こうしたリテラリージャーナリズムの潮流が、日本のノンフィクションシーンには本格的に導入されなかった。その非対称性には、ノンフィクションの書き手の社会的位置づけの違いも関係するのだろうか。リテラリージャーナリズムの担い手だったマクフィーやキダーは執筆の一方で大学で教鞭を取っていた。ノンフィクションの作品化を市場原理にのみ委ねてゆくと、商品性を高める要請もあって、三人称、そうでなければ一人称を貫く文学的整合性が重視される一方で、検証に開かれた誠実な書き方は重視されにくくなる。日本でも事実を反証可能なかたちで丁寧を描いてゆく社会科学的ノンフィクションを育成したければ、たとえばアカデミズムをノンフィクション制作の一つの場とし、市場原理以外の駆動原理——歴史的記録性への指向——を持ち込むような取り組みを検討する必要もあるのかもしれない。

〈註〉

(1) 「ノンフィクション」なるジャンルについては明確な定義はありえない。たとえば書籍流通で「ノンフィクション」と「フィクション」は明確な二分コードとしてあるが、フィクションが小説にほぼ限定されるのに対して、ノンフィクションには実用書や学術書も含まれる曖昧さがある。こうした困難はあるが、ここでは「ノンフィクション」を、取材、調査の方法を自覚的に用いて（つまり事実を扱うという自覚的な意識を著者が有して、それを実践し）、ひとつの完成した物語世界を構築している作品と作業仮説的に規定してみた。この規定は欧米語圏で *investigative report* (英), *reportage* (仏) と呼ばれるものに近い。

(2) この非対称性については歴史的経緯も影響していよう。ノンフィクションという語が上記註1のようなニュアンスをもって日本で使われるようになったのは70年代以降だという証言もある (cf. 吉村1985)。それまではノンフィクションも小説の一形式として扱われており、あえてそれを批評するために別の枠組みを必要としなかった。しかし、ノンフィクションの登場が

70年代だとすると、ニュージャーナリズムと殆ど同時に概念化されたことになり、なぜニュージャーナリズムがノンフィクションの自立を促したかに関する検討は必要だろうが、それらについては別の機会を待ちたい。

(3) 立花隆も現代小説が生断片しか取られえずにマイクロ芸術と化した時に、ニュージャーナリズムが小説の描かない、生の全体性を描いたと考えている(立花1984: cf. 106)。

(4) 『新漢文体系第30巻』1981の鎌田正による読み下し文。

(5) 雑誌初出時には引用内容において明らかな誤植以外の違いはないが、『《》』は使われず、地の文から一行空け、冒頭一段落として活字が組まれている。

(6) たとえば玉木は「『《》』のついている部分は、二矢の調書からの引用だろう。著者の手になる地の文と実際に登場人物が口にした言葉とが混在するこの文体は、トム・ウルフの『クール・クール LSD 交感テスト』を想起させる」(玉木1992: 172)と書く。

(7) たとえば2006年6月、奈良県で起きた医師宅放火殺人事件について、関係者の供述調書を引用した本が出版された事件で、奈良地検は精神鑑定を担当した医師を刑法の秘密漏示容疑で逮捕され、起訴されている。

(8) 産経新聞の記事が出た直後に『週刊文春』(1999年9月16日号)が「初めて明らかになった」とする内容を批判する記事を載せている。そこで週刊文春編集部は『増補大右翼史』の存在を指摘していた。『テロルの決算』の版元となる文藝春秋社内では少なくとも産経記事が出る前から『大右翼史』の存在が知られていたことがうかがえる。

(9) 大井真二は当時のジャーナリストが「観察」や「レンズ」といった科学用語を好んだことにも言及している。

〈引用参考文献〉

ボブ・ウッドワード、カール・バーンスタイン1980 『最後の日々』常盤新平訳 文藝春秋(原書 Woodward Bob, Bernstein Carl, *The Final Days*, Touchstone, 1976.)

- トム・ウルフ1974 「ニュージャーナリズム論」常盤新平訳『海』1974年12月号所収 中央公論（原書 Wolfe Tom 1975, *The New Journalism*, Picador Books）
- 大井眞二1999 「客観報道の起源を巡って」鶴木眞編『客観報道』1999 成文堂所収
- 奥出直人1988 「消費社会の綱渡り」『ユリイカ』1988年11月号所収
- 鎌田正1981 「春秋左氏傳」『新漢文体系第30巻』明治書院
- トレイシー・キダー1982 『超マシン誕生』風間禎三郎訳 ダイヤモンド社（原書 Kidder Tracy, *The Soul of a New Machine*, Little Brown and Company, 1981.）
- ビル・コヴァッチ, トム・ローゼンステイール2002 『ジャーナリズムの原則』加藤岳文他訳 日本経済評論社所収（原書：Kovach Bill, Rosenstiel Tom, *The Elements of Journalism: What Newspeople Should Know and the Public Should Expect*, Three Rivers Press, 2001.）
- 沢木耕太郎1977 「危機の宰相」月刊『文藝春秋』1977年7月号 所収
- 1978a 「テロルの決算」月刊『文藝春秋』1978年1 - 3月号
- 1978b 「ニュージャーナリズムについて」沢木『紙のライオン』1987所収
- 1979 「方法への冒険」*ibid.*
- 1981 「可能性としてのノンフィクション」*ibid.*
- 1982 「事実という仮説」*ibid.*
- 1984 『一瞬の夏』新潮社（新潮文庫）
- 1987 『紙のライオン』文藝春秋（文春文庫）
- 1990 「本人自身による全作品解説」『月刊カドカワ』1990年12月号
- 2004 『1960沢木耕太郎ノンフィクションⅦ』文藝春秋
- 2008a 『危機の宰相』文藝春秋（文春文庫）
- 2008b 『テロルの決算』文藝春秋（文春文庫）

- 篠田一士1985 『ノンフィクションの言語』集英社
- 立花隆1984 『アメリカ・ジャーナリズム報告』文藝春秋
- 玉木明1991 『言語としてのニュージャーナリズム』学芸書林
- 原寿雄1987 『新聞記者の処世術』晩声社
- カール・ポパー1971-2 『科学的発見の論理』大内義一他訳 恒星社厚生閣
(原書: Popper Karl Raimund, *The Logic of Scientific
Discovery*, Hutchinson, 1959.)
- 吉村昭1985 「小説とノンフィクションの間」吉村昭『時代の声, 史料の
声』1973 河出書房新社所収
- [山口二矢1960] 「被疑者山口二矢供述調書」荒原朴水編著『増補版大右
翼史』2009 大日本一誠会出版局所収

〈参考文献〉

- 川本三郎1978 「ニュージャーナリズム論」『カイエ』1978年7月号所収
- 桂秀美1978 「ニュージャーナリズム論」『流動』1978年11月号
- 原寿雄1997 『ジャーナリズムの思想』岩波書店(岩波新書)